

水稻の田植えまでの 管理のポイント

土づくり

作物は土作りが基本です。特に稲は地力に頼る割合が大きく、生育期間中に吸収する栄養分の七割が地力から、残り三割が施用した肥料からと言われています。

倒伏を避けるために肥料を控えると、収量も上がらなくなります。このような場合は、有機物のすきこみや堆肥・土壌改良材の積極的な施用を行い、土づくりを行ってください。地力からの栄養分はゆつくりと効くため、稲は栄養分が必要なときに必要な分だけ吸収することができ、化成肥料のように草丈が急に徒長することはありません。

また、ケイカルなどのケイ酸質資材の投入も有効です。稲のケイ酸の吸収量は、他の作物に比べ著しく高いことが知られています。

吸収されたケイ酸は稲の表皮に集積（ケイ質化）され、表皮をかたくします。これは、倒伏を軽減するだけでなく、病害虫が進入しにくくなるという効果もあります。

健苗作り

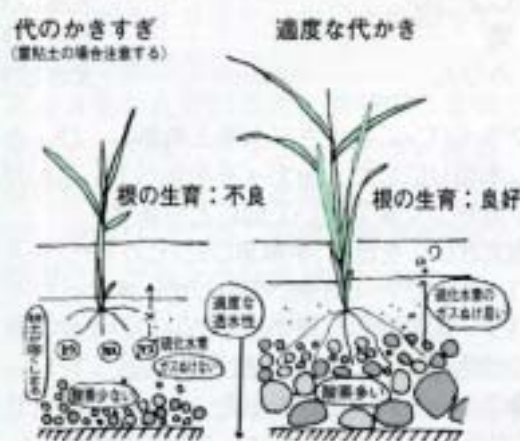
倒伏しにくいがつちりした稲にするためには、田植え後できるだけ早く丈夫な分けつを発生させることが重要です。そのためには、丈夫でしっかりとった苗をつくることが第一です。

普通期栽培（特に麦跡）では、移植から収穫までの生育期間が短くてすむ中苗が適しています。苗代に根が伸びるように底が網状になった中苗用の苗箱を用い、一箱に乾籾で八〇g程度（浸種籾では一合以下）のうすまきが基本です。



田植え時に多少の欠株が生じることもありますが、周りの株が大きくなるため、収量には全く影響はありません。苗箱は、一〇a当たり三十枚程度用意します。

発芽をそろえるため、浸種はとどきかき混ぜながら充分に行います。また、圃土は種籾が隠れる程度、厚くても五mm程度にします。1cmを越えるような厚い覆土は、苗のムラを作る大きな原因になります。



代かき

代かきで最も重要なことは、均平を保つことです。ほ場がでこぼこで田面の一部が水の上にてた場合、その部分の除草剤の効果が無くなり、雑草発生の大きな原因になります。

また、かきすぎると、特に粘土質土壌では耕土がかたくしまり、透水性・通気性が悪くなります。

田植え

一株二〜四本で坪七十株程度をしつかり植えましょう。植え付け深度は二〜三cmとし、深植えには注意しましょう。深すぎると、下の部分の分けつが泥により抑制され、穂数が減る可能性があります。

小麦赤カビ病に注意!

赤カビ病の検査・取引基準が厳しくなり、少しでも被害粒があると出荷できません。発生予防に注意し、適切な防除を行ってください。